蘇軾詩注解（三十一）

山本和義
蔡毅
中裕史
中純子
原田直枝
西岡淳
（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

子由が「清汶老の龍珠丹」に次韻す（一九八六）
子由が「清汶老が伝うる所の「秦湘二女の図」に書す」に次韻す（一九八七）
紫団参　王定国に寄す（一九八八）
劉燾撫勾が「蜜漬の荔支」に次韻す（一九八九）

曾仲錫が元日に寄せらるるに次韻す（一九九一）
立春の日　小集して李端叔に戯る（一九九〇）
子由が生日に檀香の観音の像と新合の印香・銀篆の盤とを以て寿を為す　一首（一九九二）
李端叔が「保の倅翟安常の闕に赴くを送る」に次韻して、兼ねて子由に寄す（一九九三）
中山の松醪、雄州の守　王引進に寄す（一九九四）

一九八六（施注三四―二五）

次韻子由清汶老龍珠丹

子由が「清汶老の龍珠丹」に次韻す

1 天公不解防癡龍　天公　解く痴龍を防がず
2 玉函寶方出龍宮　玉函の宝方　龍宮より出づ
3 雷霆下索無處避　雷霆　下り索めて避くる処無し
4 逃入先生衣袂中　逃れて入る　先生の衣袂の中
5 先生不作金椎袖　先生　金椎を袖にすることを作さず
6 玩世徜徉隱屠酒　世を　玩びて徜徉して屠酒に隠る
7 夜光明月空自投　夜光の明月　空しく自ら投じ
8 一鍛何勞緯蕭手　一鍛　何ぞ労せん　緯蕭の手
9 黄門寡好心易足　黄門は好むこと寡くして心足り易く
10 荊棘不生梨棗熟　荊棘は生ぜず　梨棗熟す

11　玄珠白璧両無求　　玄珠白璧　両つながら求むる無く
12　無脛金丹來入腹　　脛無き金丹　来りて腹に入る
13　區區分別笑樂天　　区区として分別すること　楽天を笑い
14　那知空門不是仙　　那ぞ知らん　空門の是れ仙ならざるを

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。時に知定州として定州にあった。

○子由　蘇轍のもとの詩は伝わらない。○清汶老　未詳。○龍珠丹　仙薬の名。龍珠は『太平広記』巻四〇二に引く任昉『述異記』鯨魚目に、「凡そ珠に龍珠有り。龍の吐く所なり」とある。

1○天公　天帝のこと。2○玉函一句　玉函宝方は、薬方すなわち薬の処方を記した書物。『酉陽雑俎』巻二「玉格」に、終南山に隠棲する孫思邈のもとに昆明池に住まう龍が助けを乞いに来た話がみえる。孫は龍に「我れ　昆明の龍宮に仙方三千首有るを知る。爾　伝えて予に与えよ。予　将に汝を救わんとす」と言って、仙方を受け取って龍を救ってやり、その仙方をもとに『千金方』を著した。『続仙伝』孫思邈にもこれと類似した話がみえる。3 4○雷霆・逃入二句　『五燈会元』巻六「（龍湖）普聞禅師」に、龍が普聞禅師に助けを乞いに来た話がみえる。「（禅）師曰く、「汝、罪を上帝に得たり、我れ何ぞ能く力を致さん。然りと雖も、形を易えて来たる可し」と。俄かに老人の在る所を失して、座旁に一小蛇有るを視る。延縁として袖に入る。暮に至って、雷電　山を震わせ、風雨　交ごも作る。師は危坐して傾かず。旦に達して晴霽す。袖を垂るれば蛇は地に堕ちて去る」とある。韓愈「張籍を調る」詩（『韓昌黎集』巻五）に、「仙官　六丁に勅して、雷電して下りて取将せしむ」とある。5○金椎袖　『漢書』淮南厲王長伝に、「（長）常に心に辟陽公を怨むも敢えて発せず。……乃ち往きて辟陽公を請ず。辟陽公　出でて之に見ゆ。即ち袖自り金椎もて之を椎つ」とある。金椎は、金属製の椎。『史記』淮南衡山伝では鉄椎に作る。6○玩世　礼法にこだわらず世俗を軽視すること。『漢書』東方朔伝に、「隠に依りて世を玩び、時に詭いて逢わず」とある。○徜徉　のんびりと自由なさま。韓愈「李愿が盤谷に帰るを送る序」（『韓昌黎集』巻一九）に、「吾が車に膏し、吾が馬を秣え。子に盤に従い、

吾が生を終うるまで以て徜徉たらん」とある。○隠屠　『史記』魏公子伝に、「侯生　公子に謂いて曰く、「臣の過ぎる所の屠者は朱亥なり。此の子は賢者なれども、世に能く知るもの莫し。故に屠間に隠るる耳」と」とある。屠間は、屠畜業者の仲間をいう。杜甫「春を傷む　五首」その三（『杜詩詳注』巻一三）に、「賢は多く屠釣に隠る、王　肯て載せて同じく帰らんや」とある。7○夜光一句　『史記』鄒陽伝に、「明月の珠・夜光の璧も、闇を以て人に道路に投ずれば、人の剣を按じて相眄ざる者無し。何となれば則ち因無くして前に至ればなり」とある。一句は、清汶老が龍珠丹にも心を動かされないことをいう。8○一鍛一句　鍛は、打って鍛えること。ここでは叩いて砕く意に解する。緯蕭は、あしなどの草を織ること。『荘子』列禦寇篇に、「河上に家の貧しく蕭を緯ることを恃んで食らう者有り、其の子　淵に没りて千金の珠を得たり。其の父　其の子に謂いて曰く、「石を取り来たりて之を鍛け。夫れ千金の珠は必ず九重の淵、驪龍の頷下に在り。子の能く珠を得たるは必ず其の睡りしに遭えばなり……」と」とある。9○黄門　門下省のこと。ここでは門下侍郎であった蘇轍をいう。「召し還されて都門に至りて先ず子由に寄す」詩（『蘇軾詩注解（二十三）』）の注を参照。10○荊棘一句　荊棘は、いばら。梨棗は、仙果である交梨と火棗。陶弘景『真誥』巻二に、「火棗交梨の樹は已に君の心中に生ず。心中に猶お荊棘の相雑うる有り、是を以て二樹見えずして審らかならず。荊棘を翦りて此の樹を出だす可し」とある。一句は、道心を得た蘇轍は物欲に惑わされたりなどしないことをいう。11 12○玄珠・無脛二句　玄珠は、黒い珠玉。『荘子』天地篇に、「黄帝　赤水の北に遊び、崑崙の丘に登りて南を望む。還帰せんとして、其の玄珠を遺えり」とある。白璧は、白い璧玉。『史記』虞卿伝に、「虞卿なる者は遊説の士なり。蹻を蹈き簦を檐いて趙の孝成王に説く。一たび見えて黄金百鎰・白璧一双を賜わり、再び見えて趙の上卿と為る。故に号して虞卿と為す」とある。無脛は、足がないこと。孔融「盛孝章の書を論ず」（『文選』巻四一）に、「珠玉の無脛にして自ら至るは、人の之を好むを以てなり。況や賢者の足有るをや」とある。金丹は、黄金と丹砂を練って作る不老長寿の仙薬。『抱朴子』内篇巻四にさまざまな金丹の製法が記されている。二句は、求めようともしていない龍珠丹が、清汶老の手を経て蘇轍の元に渡ったことをいう。13 14○区区・那知二句　区区は、取るに足りない小さいさま。白居易「客の説に答う」詩（『白居易集箋校』巻三六）に、「吾れ空門を学ぶ　仙を学ぶに非ず、恐らくは君が此

の説は是れ虚伝ならん。海山は是れ吾が帰る処ならず、帰らば即ち応に兜率天に帰るべし」とある。二句は、仏・道を区別した白居易とは異なって、清汶老と蘇轍の二人は仏・道を分けて考えることはないという。

天帝さまが愚かな龍を見過ごしにしていたために、仙薬の秘伝書が龍宮から流出してしまいました。龍王が稲妻を走らせて追跡してきたので身を隠す処とてなく、愚かな龍は先生（清汶老）の袖の中に逃げ込みました。

先生は金椎を袖に隠し持つような粗暴な人間ではなく、世俗の事を軽んじて、下じもに混じって気ままに暮らしておられます。夜光の璧や明月の珠のように貴重な龍珠丹を、いきなり目の前に投げつけられても心を動かさず、叩いて砕くとなれば、かの草織りの手を煩わすまでもありません。

黄門どの（蘇轍）は寡欲にして足ることを知っておられるので、その心の中には道心の深さを示す火棗や交梨が熟していて、邪念のいばらは生えていない筈です。あれこれと宝玉を探し求めたりしないのに、足のない金丹のような龍珠丹が（清汶老の手を経て）われから懐に飛び込んできました。お二人（清汶老と蘇轍）は、白楽天の了見はちっぽけだと笑っておられることでしょう、仏道と仙道は別のものだとは思っておられないのですから。

一九八七（施注三四―二六）

次韻子由書清汶老所傳秦湘二女圖

子由が「清汶老が伝うる所の「秦湘二女の図」に書す」に次韻す

1　春風消冰失瑤玉　　春風　氷を消して瑤玉を失う

2　我本無身安有觸　　我れ本と身無し　安くんぞ触有らん

3 羊生得婦如得風　羊生の婦を得ること　風を得るが如し
4 握手一笑未爲辱　手を握って一笑す　未だ辱と為さず
5 先生室中無天遊　先生が室中に天遊無くんば
6 佩環何處鳴風甌　佩環　何れの処にか風甌を鳴らさん
7 隨魔未必皆魔女　魔に随うは未だ必ずしも皆な魔女ならず
8 但與分燈遣歸去　但だ与に燈を分けて帰り去ら遣めよ
9 胡爲寫眞傳世人　胡為れぞ真を写して世の人に伝えん
10 更要維摩一轉語　更に維摩の一転語を要するか
11 丹元茅茨祇三間　丹元が茅茨　祇だ三間
12 太極老人時往還　太極老人　時に往還す
13 檢點凡心早除拂　凡心を検点して早に除き払え
14 方平神鞭常使物　方平が神鞭　常に物を使う

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○子由　蘇轍のもとの詩は伝わらない。○清汶老　未詳。○秦湘二女　王注に引く趙次公注は、韓愈「梁国の恵康公主の挽歌　二首」その二（『韓昌黎集』巻九）に「秦地　簫を吹く女、湘波　瑟を鼓する妃」とあるのを引いて、二女とはこれを画いたものかという。

1○春風一句　『太平広記』巻五九に引く劉向『列仙伝』江妃には、鄭交甫が漢江に遊んだ時に美しく着飾って輝く珠玉を身に佩びた二人の女性を見て心惹かれた話がみえて、「（二女）手ずから佩を解いて以て交甫に与う。交甫　受けて之を懐にす。既に趨りて去る。行くこと数十歩にして懐を視れば空にして珠無し。二女も忽として見えず」とあ

る。一句は、清汶老の秦湘二女図に画かれた湘君、すなわち江妃二女を詠じたものと解したい。2○我本一句　『楞厳経』（『大正蔵』第一九巻）に、「是の故に当に触と身と倶に処る所無きを知覚すべし。即ち身と触と、二つながら倶に虚妄にして、本と因縁に非ず」とある。一句は、人にはそもそも身が存在しないのに、触れることなどできよう筈がないというほどの意。3○羊生一句　羊生は、羊権のこと。陶弘景『真誥』巻一に、萼緑華という美しい仙女が升平三年十一月十日夜に羊権の家に降臨した話がみえる。4○握手一句　同じく『真誥』巻一に、紫微王夫人に連れられて九華真妃が楊某の家に降りた話がみえる。「（真妃）乃ち某の手を取り、之を執りて自ら床より下る。未だ戸を出でざるの間に、忽然として見えず」とある。未為辱は、蘇軾「欧陽叔弼　訪わる。陶淵明が事を誦して其の絶識を歎ず……」詩（『蘇軾詩注解（十六）』）にも、「束帯して督郵に向かわんこと、小屈にして未だ辱と為さず」と詠じられる。5○先生　清汶老をいう。○無天遊　天遊は、ゆったりとした空間。『荘子』外物篇に、「心に天遊有り。室に空虚無ければ、則ち婦姑　勃谿し、心に天遊無ければ、則ち六鑿相攘す」とある。6○佩環　おびだま。腰に下げる環状の玉。阮籍「詠懐詩　十七首」その二（『文選』巻二三）に、1句の注に引いた鄭交甫を詠じて、「交甫　環佩を懐にすれば、婉孌として芬芳有り」とある。○風甌　甌は、素焼きの土器を用いた打楽器。蘇軾は「雨中に舒教授に過る」詩（『蘇東坡詩集』第四冊六〇五頁）に、「坐しては蒲褐の禅に依り、起っては風甌の語を聴く」と詠じている。その注も参照。7 8○随魔・但与二句　『維摩経』菩薩品（『大蔵経』第一四巻）に、悪魔の波旬によって与えられた一万二千人の天女を波旬とともに魔宮に帰す際に、維摩詰が無尽燈という法門を授けて、「汝等、魔宮に住すと雖も、是の無尽燈を以て無数の天子・天女をして阿耨多羅三藐三菩提に心を発さしめば、仏恩に報じ、亦た大いに一切衆生を饒益するもの為らん」と諭した。すると天女らは維摩詰の足を頭におしいただいてから、「魔に随いて宮に還り、忽然として現れざりき」と記されている。9○写真　人物を画くこと。真はえすがた。「題毛女真」詩（『蘇軾詩注解（三十一）』）の詩題の注を参照。10○維摩　維摩詰。釈迦の弟子の名。○一転語　心機を一転させて悟らせる力のあることば。『臨済録』勘弁（『大正蔵』第四七巻）に、臨済慧照禅師が食事当番の僧（飯頭）に代わって黄檗禅師の答えを求めるくだりが記されていて、（慧照禅師）「飯頭は不会、請う、和尚代わりて一転語せられよ」とある。11○丹

七

元　姚丹元を指すと思われる。姚丹元は蘇軾の知定州時代に同じく定州に在った。「秦少游が韻に次ぎて姚安世に贈る」詩ならびに「丹元姚先生が韻に次ぐ」詩（ともに『蘇軾詩注解（二十六）』）の詩題の注を参照。○茅茨　かやぶきの家。粗末な家屋をいう。三間は部屋の数。白居易「草堂に別る　三絶句」その三（『白居易集箋校』巻一七）に、「三間の茅舎　山に向かいて開き、一帯の山泉　舎を遶りて廻る」とある。「参寥上人　初めて智果院を得。……」詩（『蘇軾詩注解（四）』）の注も参照。12○太極老人　仙人の名。『太平広記』巻二五に引く劉向『列仙伝』元柳二公に、唐の元和年間に元徹と柳実の二人が孤島に漂着して玉虚尊師と南溟夫人に遇う話がみえる。二人は人間世界に帰してもらう際に、師となるべき人を尋ねたところ、「南岳の太極先生なる耳。当に自ら之に遇うべし」と教えられた。その後、太極先生を尋ねたが会うことがかなわず、失望して帰る途中に、「大雪に因りて、大叟の樵を負いて鬻ぐを見る。二子　其の衰うること厲しきを哀れんで、之に飲まするに酒を以てす。樵担の上に「太極」の字有るを睹て、遂に之に礼して師と為す」とある。13○検点　注意して調べること。韓愈「劉師服に贈る」詩（『韓昌黎集』巻五）に、「丈夫命存せば　百も害無し、誰か能く形骸の外を検点せん」とある。○凡心　世俗まみれの心。○除払　俗塵をはらい除くこと。14○方平一句　『太平広記』巻六〇に引く葛洪『神仙伝』麻姑に、仙人の王遠（字は方平）が蔡経の家に降臨した話がみえる。その後に麻姑が降ると、その手の爪が鳥のように長いのを見た蔡経は、背中のかゆいときにはこの爪で掻いたら気持ちがいいことだろうと心に思った。「方平　已に経が心中に念ずる所を知る。即ち人をして経を牽きて之を鞭たしむ。但だ鞭の経が背に着くを見るのみにして、亦た人の鞭を持つ者有るを見ず。方平　経に告げて曰く、「吾が鞭は妄りに得べからざるなり」と」とある。○使物　鬼神などを使役すること。『史記』封禅書に、「（李）少君なる者は……其の年及び其の生長を匿し、常に自ら七十と謂う。能く物を使い、老を却く」とある。

春風が吹いて氷が融けるように、（道心があれば）仙女がくれた珠玉も（仙女自身も）消えてしまうもの、人には身体などもともと無いのだから、ものに触れることも無いのです。羊くんは美女を得てもどこ吹く風、美女の手をとってにっこり笑ったとしても恥ずかしいことではありません。

先生（清汶老）の居室にゆったりとした空間が無ければ、仙女が身につけたおびだまもどうして風甌の音を鳴らせましょう。魔王につき従っている者はみな魔女だというわけではなく、維摩居士のように無尽燈を分け与えて帰らせればよいのです。去るに任せればよい仙女の絵姿をなぜとどめて世の人に伝えるのか、維摩居士のようにわたしにも何か気の利いたことを言えとのことでしょうか。

（姚）丹元は三間しかない粗末な茅葺の家に住んでいますが、その家には太極老人が出入りしています。俗念がないかどうかよく気をつけて、生じればすぐに除き去ってしまいなさい、美女に心を奪われたりしたら、

（王）方平の配下に神鞭を見舞われることになりますよ。

（担当　中　裕史）

一九八八（施三四―二七）

紫團參寄王定國

紫団参　王定国に寄す

1　谽谺土門口　　谽谺たり　土門口

2　突兀太行頂　　突兀たり　太行の頂

3　豈惟團紫雲　　豈に惟だ紫雲を団むるのみならんや

4　實自俯倒景　　実に自ら倒景に俯す

5　剛風被草木　　剛風　草木に被らしめ

6　眞氣入苕穎　　真気　苕穎に入る

7 舊聞人銜芝　旧と聞く　人銜芝
8 生此羊腸嶺　此の羊腸の嶺に生ず
9 纖攕虎豹鬣　纖攕たり　虎豹の鬣
10 蹙縮龍蛇瘿　蹙縮たり　龍蛇の瘿
11 蠶頭試小嚼　蚕頭　試みに小嚼せば
12 龜息變方騁　亀息　方に騁するを変ず、と
13 矧予明眞子　矧んや　予が明真子
14 已造浮玉境　已に浮玉の境に造るをや
15 清宵月挂戶　清宵　月　戸に挂り
16 半夜珠落井　半夜　珠　井に落つ
17 灰心寧復然　灰心　寧ぞ復た然えんや
18 汗喘久已靜　汗喘　久しく已に静かなり
19 東坡猶故目　東坡は　猶お故目のごとく
20 北藥致遺秉　北藥　遺秉を致す
21 欲持三椏根　三椏の根を持して
22 往侑九轉鼎　往きて九転の鼎を侑けんと欲す
23 爲予置齒頰　予が為に歯頰に置け
24 豈不賢酒茗　豈に酒・茗に賢らざらんや

一〇

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○紫団参　太行山脈の紫団山（山西省）で採取される喘息薬の人参。『夢渓筆談』巻九「人事一」に、「王荆公（王安石）は喘（ぜんそく）を病む。薬に紫団山の人参を用いんとするも、得可からず」とある。『太平寰宇記』巻四五「河東道」潞州・上党県の条に「紫団山。地理志に云う、此の山　人参・紫草を出だす、と」とある。○王定国　王鞏（一〇四八～一一一二以降）、定国はその字。蘇軾について学問を学び、また詩文をよくした。『宋史』巻三二〇に略伝がある。「顔復を送り、兼ねて王鞏に寄す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊二七八頁）、および「王鞏に答う。鞏将に過られんとし、詩有り……」詩（『蘇東坡詩集補〔一〕』）の注を参照。

1○谽谺　山谷が大きく広がるさま。双声の語。司馬相如「上林の賦」（『文選』巻八）に、「谽呀豁閜として、阜陵別隣たり」とあり、司馬彪の注に、「谽呀は大いなる貌、豁閜は空虚なり」とある。○土門口　西方から太行山脈を越えて河北平野に出る所に位置する要害の地。もと井陘口といった。『蘇軾詩注解（二十九）』に引く作品番号一九七六の詩の注を参照。2○突兀　高くそびえるさま。畳韻の語。木華「海の賦」（『文選』巻一二）に「魚は則ち横海の鯨、突抓として孤り遊ぶ」とあり、李善注に「突抓は、高き貌」とある。○太行　太行山脈のこと。河南・河北・山西省にわたる。『本草綱目』（巻一二）の人参の条の「集解」に、「潞州の太行紫団山に出づる所は、之を紫団参と謂う」とある。3○団紫雲　紫色の雲があつまること。査慎行が詩題の注に引く「瑞応録」に「唐の明皇　潞邸に潜み、重九に壺関山に登る。東北に紫雲の見わるる有り、光彩　日を照らす。因りて紫雲山と名づく。即ち紫団なり」とある。『太平御覧』巻八七二に引く『漢武故事』に「（漢）宣帝　甘泉を祀るに、紫雲の西北従り来たりて殿前に散る有り」とあるように、紫雲は瑞祥でもある。4○倒景　日月の光が下から照らす天空の高所。「木櫪観を過ぐ」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊一〇四頁）を参照。5○剛風　天空の高所に吹く風。『抱朴子』内篇巻一五（雑応）に「上昇すること四十里なれば、名づけて太清と為す。太清の中は、其の気甚だ剛うして、能く人に勝うなり」とある。6○真気　気の本源。杜甫「重表姪王砅評事が南海に使するを送る」詩（『杜詩詳注』巻二三）に「秦王　時に坐に在り、真気　戸牖を驚かす」とある。○苕穎　草木の穂や茎をいう。劉禹錫「畬田の作」（『劉禹錫集箋証』巻

二七）に「蒼蒼として一たび雨ふりし後、茗穎は雲の如く発す」とある。7○人銜芝　紫団参をいう。人銜は、人参の別名。『本草綱目』（巻一二）の人参の「釈名」を参照。芝は、めでたいしるしの神草のこと。8○羊腸　太行山の曲がりくねった険しい坂。『漢書』地理志上に「上党郡、……壺関、羊腸版有り」とある。曹操「苦寒行」（『文選』巻二七）に「北のかた太行山を上れば、艱なる哉　何ぞ巍巍たる、羊腸　坂は詰屈し、車輪　之が為に摧かる」とある。9○纖攕　か細いさま。杜甫「絶句漫興　九首」その八（『杜詩詳注』巻九）に「舍西の柔桑　葉拈む可し、江畔の細麦　復た纖纖たり」とある。攕は纖と同じ。10○蹙縮　丸くかがまるさま。蘇軾「子由の「園中の草木を記す」に和す　十首」その九（『蘇東坡詩集』第一冊五〇四頁）に、「下に千歳の根有り、蹙縮して蟠虬の如し」とある。11○蚤頭　蚤の頭のような人参の形状。王注（李厚）に「俗に称すらく、人参は蚤頭の如き者最も良し、と」とある。12○亀息　飲食を控えて呼吸を調える道教の長生術。『抱朴子』内篇巻三（対俗）に「飲まず食わざること此くの如く久しうして死せず。其の凡物と同じからざること亦た遠し。亦た復た何ぞ千歳を疑わんや。仙経に亀の息を象るも、豈に以有らずや」とある。13○明真子　王鞏をさす。明真は、世俗的な価値に煩わされないこと、魏・阮瑀「隠士」詩（『藝文類聚』巻三六八）に「何ぞ患わん　貧苦に処るを、但だ当に明真を守るべし」とある。14○浮玉境　仙界をいう。陸亀蒙「襲美（皮日休）が太湖の詩に和し奉る　二十首」その一「初めて太湖に入る」（『全唐詩』巻六一八）に「又た云う　浮玉を構え、宛も崑閬に匹う」（崑閬は、神仙が住まうとされる崑崙山の閬苑）とある。16○珠落井月の姿が井戸に映ること。道教では、珠のような津液を腹中に入れるという解釈もある。一韓智翃の聞書に、「珠ハ唾ゾ。井ハ腹ゾ。言（フココロ）ハ、定国ヨク道士ノ観法ヲシテ、朝ニハ日気ヲ飲、夜ハ月液ヲ飲、珠ノ如（キ）ナル津ヲ飲テ、是ヲ腹中納テ、養生スルゾ」（『四河入海』巻二四の一）とある。17○灰心一句　灰心は、何にも左右されない悟りきった境地。『荘子』斉物論篇に「形は固より槁木の如くならしむ可く、心は固より死灰の如くならしむ可きか」とある。然は、燃と同義。19○故目　以前と同じ目でみること。20○遺秉　刈り遺された稲穂。『詩経』小雅（甫田之什）「大田」に、「彼に遺秉有り、此に滞穂有り」とあり、孔穎達の疏に、「彼の処に遺余の秉把有り」とある。ここでは、蘇軾が贈る紫団参ゆえこのように表現した。21○三極根　人参のこと。根が三ツ又である形状か

らの呼び名。22〇九転鼎　道教では薬をつくる煉丹には一転から九転まであり、九転が最良である。『抱朴子』内篇巻四（金丹）に「九転の丹は、之を服すること三日にして仙を得ん」とある。23 24〇為予・豈不二句　酒茗は、酒と茶。一韓智翃の聞書に、「予ハ、坡自（ラ）云（フ）ゾ。坡言（フココロ）ハ、我ガ今此（ノ）人参ヲ贈（ル）ニツイテ、予ガ為（ニ）此ノ人参ヲ定国ドノ歯頰ノ間ニ置（キ）テ味（ワヒ）テ看ヨ。此ノ味ハ、酒茗ニハマサルベキゾ」とある。

土門口は大きく開かれ、太行山の頂は高々と聳えている。そこはめでたい紫雲があつまるのみならず、まさに日月を見下ろすところ。草木は剛風にふきなびかされて、枝葉からその風の気が入り込んでいく。

伝え聞くところ紫団参は、九十九折りの坂を登った山の頂に生え、ごく細いさまは虎豹のたてがみのようで、かがまるさまは龍蛇のこぶのよう。その蚕の頭の形をしたところをちょっとかじれば、走ったばかりの荒い息づかいもたちまち亀の息と変わる、と。

ましてや我が「明真子」王鞏どのは、すでに仙人の境地におられて、（その心のありようは）清らかな宵に戸にさしかかる月光か、真夜中に井戸に映る月のよう。透徹した悟りの心はもはや何にも邪魔されることなく、何かを求めて汗してあえぐことも久しく無い。

（このような王鞏どのに）東坡はなお昔通りに、この余りものの北方の薬（紫団参）をさしあげます。三ツ又の根を持って、（仙人になるための）九転の丹薬作りをお助けいたしましょう。このわたしのためにどうか口にふくんでみてはくださらぬか。酒や茶よりはましであろうから。

（担当　中　純子）

一九八九（施三四―二八）

次韻劉燾撫勾蜜漬荔支

劉燾撫勾が「蜜漬の荔支」に次韻す

1 時新滿座聞名字　時新　満座　名字を聞く
2 別久何人記色香　別るること久しくして何人か色香を記せん
3 葉似楊梅蒸霧雨　葉は楊梅の霧雨に蒸すに似て
4 花如盧橘傲風霜　花は盧橘の風霜に傲るが如し
5 每憐蓴菜下鹽豉　毎に憐む　蓴菜に塩豉を下すを
6 肯與葡萄壓酒漿　肯て葡萄の酒漿を圧するに与せんや
7 回首驚塵卷飛雪　首を回らせば　驚塵　飛雪を巻く
8 詩情眞合與君嘗　詩情　真に合に君と嘗むべし

元祐八年（一〇九三）、五十八歳の作。

○劉燾　字は無言、長興（浙江省）の人。元祐三年の進士で、官位は秘閣修纂に至った。このとき撫勾として定州に在った。『続資治通鑑長編』元祐元年二月戊子の条によれば、撫勾は安撫司に属する事務職（勾当官）。蜜漬荔支は、作品番号一九七二「曾仲錫承議が蜜漬の生荔支を食らうに次韻す」詩の注（『蘇軾詩注解（二十九）』）を参照。

1 2○時新・別久二句　時新は、その季節の新鮮な食物。鮑照「少年時至衰老行に代う」（『鮑氏集』巻三）に、「好酒　芳気多く、肴味　時新に厭く」とある。○色香　荔支の色と香りのこと。白居易「荔枝図の序」（『白居易集箋校』巻四五）に、「（荔枝）若し本枝を離れなば、一日にして色変じ、二日にして香り変じ、三日にして味変じ、四五日よ

り外は、色・香り・味尽く去る」とある。この二句は唐・薛能の「荔枝詩」（『全唐詩』巻五六一）に、「歳杪　監州にて曽て樹を見る、時新　座に入りて久しく名を聞く」とあるのを踏まえる。３４○葉似・花如二句　楊梅は、ヤマモモ。盧橘は、ビワのこと。『蘇軾詩注解』（四）に収める作品番号一六二八の詩の注を参照。白居易「荔枝図の序」（『白居易集箋校』巻四五）に「華は橘の如く、春栄ゆ」とある。５○蓴菜　ぬなわ。ジュンサイ。○塩豉　大豆を原料とする調味料で、もろみやみその類。『史記』貨殖伝に、「鼓麴・塩豉千荅」（荅は容量の単位）とある。『世説新語』言語篇に、「陸機　王武子に詣る。武子　前に数斛の羊酪を置き、指して以て陸に示して曰く、「卿の江東　何を以てか此れに敵する」と。陸云う、「千里の蓴羹有り、但だ未だ塩豉を下さざるのみ」と」とある。６○肯与一句　圧は、酒をしぼること。李白「金陵の酒肆にて留別す」詩（『李太白全集』巻一四）に、「風　柳花を吹きて満店香し、呉姫　酒を圧り　客を喚びて嘗めしむ」とある。酒漿は、酒のこと。『詩経』小雅「大東」に、「維れ北に斗有るも、以て酒漿を挹む可からず」とある。８○詩情一句　薛能「劉相が天柱の茶を寄せらるるに謝す」詩（『全唐詩』巻五六○）の「粗官　寄与せらるるも真に抛却し、頼いに詩情有り　合に嘗むるを得べし」を踏まえる。

取れたての果物として、その名前は皆さんお聞き及びでしょうが、長い間お目にかからずにいればその色と香りを誰が覚えていましょう。葉は霧雨に潤うみずみずしい山桃のようで、花は風霜に負けずに凛々しく咲いている枇杷のようです。ジュンサイをもろみ和えにするなんて、いつもどうかと思っていたし、ぶどうを酒の材料にするなんて以てのほかです。振り返ってみると、外では風に吹かれる土埃が飛ぶ雪にまじっています。（そんなところでは、たとえ蜜に漬けたものでも）荔支に込められた詩情をあなたと分かち合うことに異論はありません。

（担当　蔡　毅）

一九九〇（施三四―二九）

立春日小集戲李端叔

立春の日　小集して李端叔に戲る

1 白髮已十載　白髮　已に十載
2 青春無一堪　青春　一も堪うること無し
3 不驚新歲換　新歲の換わるに驚かず
4 聊與故人談　聊か故人と談ず
5 牛健民聲喜　牛健やかにして民声喜び
6 鴉嬌雪意酣　鴉嬌にして雪意酣なり
7 霏微不到地　霏微として地に到らず
8 和暖要宜蠶　和暖にして要ず蚕に宜しからん
9 歲月斜川似　歲月　斜川に似るも
10 風流曲水慚　風流　曲水に慚ず
11 行吟老燕代　行吟　燕代に老い
12 坐睡夢江潭　坐睡　江潭を夢む
13 丞掾頗哀援　丞掾　頗る援を哀れみ
14 歌呼誰怕參　歌呼　誰か参を怕れん
15 衰懷久灰槁　衰懷　久しく灰槁たるも

16 習氣尚饞貪　　習気　尚お饞貪
17 白啖本河朔　　白啖　本と河朔
18 紅消眞劍南　　紅消　真に劍南
19 辛盤得青韮　　辛盤は青韮を得て
20 臘酒是黄柑　　臘酒は是れ黄柑
21 歸臥燈殘帳　　帰って燈残の帳に臥し
22 醒聞葉打庵　　醒めて葉の庵を打つを聞かん
23 須煩李居士　　須らく李居士を煩わして
24 重說後三三　　重ねて後三三を説かしむべし

元祐九年（一〇九四）、五十九歳の作。

○李端叔　李端叔は、李之儀。端叔はその字。滄州無棣（山東省）の人。姑渓居士と号した。『宋史』巻三四四に伝がある。蘇軾が定州に赴任すると、その幕府に従事した。蘇軾、孫子発、滕興公、曽仲錫と五人で仕事が終わると場所を決めて集まり、「窮日　力めて歓を尽くして罷」み、夜には「暁角の動くを以て期と為」したという（李之儀『姑渓居士文集』巻三八に収める「跋戚氏」）。

4○故人　友人。ここでは李端叔のこと。5○牛健一句　牛は、土牛のこと。立春の日の習俗で、農耕のはじまりを告げる行事。土で作った牛を府県の庁署の門や城門に設けて民びとに示した。宋の頃には、土牛を鞭で打つ行為が加わって打春という行事になった。中村喬『続　中国の年中行事』（一九九〇年、平凡社）「正月」立春・二「土牛」を参照。6○鴉嬌一句　鴉嬌は、鴉が騒いで人目をひくさまをいうか。杜牧「街西長句」詩（『樊川文集』巻二）に「碧池　新たに漲りて嬌鴉浴し、分かち鎖す　長安富貴の家」とある。雪意は、雪もよい。酣は、酔いがまわること。こ

こでは、雪もよいが充ちてまさに降り出しそうな状態をいう。鴉と雪を関連づける用例は見当たらないが、一韓智翃の聞書には、「言（フココロ）ハ、立春ノ日、ヲリフシ雪ガフル程ニ、雪裏ニハ、必ズ鴉ガ食ガナイ程ニ、人ニ嬌食ヲ求（ムル）ゾ」（『四河入海』巻十一の一）とある。7○霏微　ちらつくさま。梁の沈約「庭雨　詔に応ず」詩（『初学記』巻二）に「震霖として裁かに垂れんと欲し、霏微として注ぐ能わず」とある。また、杜甫「曲江にて酒に対す」詩（『杜詩詳注』巻六）に「苑外の江頭　坐して帰らず、水精の宮殿　転た霏微」とある。○不到地　雪が溶けやすくて、地面まで届かないことをいう。杜甫「又た雪ふる」詩（『杜詩詳注』巻一四）に「南雪　地に到らず、青崖霑いて未だ消えず」とある。8○和暖　あたたかなさま。曹丕「朝歌の令呉質に与うる書」（『文選』巻四二）に「天気　和暖にして、衆果　具に繁る」とあり、また、杜甫「賛上人に寄す」詩（『杜詩詳注』巻七）に「亭午　頗る和暖にして、石田も又た収むるに足る」とある。○宜蚕　蚕に効くこと。『詩経』鄘風「定之方中」に「景山と京と、降りて桑を観る」とあり、その毛伝に「地勢　蚕に宜しくして、以て民を居らしむべし」とある。蘇軾「子由の「踏青」に和す」詩（『蘇東坡詩選』六一頁）に「蚕に宜しきは　汝の繭をして甕の如くならしめ、畜に宜しきは　汝の羊をして麕の如くならしめん」とある。9 10○歳月・風流二句　斜川は川の名。晉の陶淵明は、正月五日、故郷栗里（江西省）の南にある小渓斜川に隣人たちと遊び、春景色を愛でて詠じた。「斜川に遊ぶ　幷びに序」（『陶淵明集』巻二）が知られる。作品番号九二七（『蘇軾詩注解補（四）』所収）の詩の注を参照。曲水は、三月の上巳の日に行われる宴のこと。特に、晉の王羲之が蘭亭で催した曲水の宴が有名。蘇軾「文与可の「洋川の園池　三十首」に和す　禊亭」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊五一頁）を参照。9 10句は、立春の宴を主催する立場として陶淵明、王羲之の故事を引き合いに、集いの時期としては斜川の遊びに並ぶと胸を張りつつも、風流では曲水の宴にひけをとると述べている。11○行吟一句　行吟は、歩きながら詩を歌うこと。『楚辞』屈原「漁父」に「屈原　既に放たれ、江潭に遊び、沢畔に行吟す」とある。燕代は、燕国と代郡。北方の地。一句は、蘇軾が今、任地の定州で老いの日々を過ごしていることを述べている。12○坐睡　まどろむ。蘇軾「臘日　孤山に遊び、恵勤・恵思の二僧を訪う」詩（『蘇東坡詩集』第二冊二〇〇頁）に「紙窗　竹屋　深うして自ら暖かなり、褐を擁し坐睡して円蒲に依る」とある。○江潭　江の

ほとり。ひいて長江以南の地をいう。11句の注を参照。13〇丞掾一句　丞は、地方官の副官。掾は、地方官の属官。合わせて地方の下僚をいう。援は、後漢の馬援のこと。蘇軾「趙郎中和せらる。戯れに復た之に答う」詩（『蘇東坡詩集』第四冊一一七頁）の注を参照。蘇軾は、自らを馬援に擬えて、属僚たちが知事の自分のぶんまで官務をやってくれるおかげで、自分は気楽に遊んで過ごしていると述べている。14〇歌呼一句　歌呼は、酒宴を開き歌をうたって大騒ぎすること。参は、漢の曹参のこと。蘇軾「再び和す」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊二〇九頁）を参照。蘇軾は、自らを曹参に擬えて、酒宴で大騒ぎする属僚たちに交じって知事である自分も興じているので、自分を憚って窮屈に思う者などいないと述べている。15 16〇衰懐・習気二句　衰懐は、心の衰え。白居易「皇甫郎中が「新菊花に対して憶わる」に酬う」詩（『白居易集箋校』巻三二）に「菊を愛する高人は逸韻を吟じ、秋を悲しむ病客は衰懐に感ず」とある。灰槁は、冷えた灰と槁木。無為自然の境地に達した人を喩える。蘇軾「王鞏が「独眠」に次韻す」詩（『蘇東坡詩集補〔二〕』）の注を参照。習気は、仏教で、消えずに残る煩悩のこと。『蘇軾詩注解（三）』に収める作品番号一六一六の詩の注を参照。饞貪は、むさぼるさま。韓愈「司門廬四兄雲夫院長の望秋の作に酬ゆ」詩（『韓昌黎集』巻五）に「坑を馳せ　谷に跨って　終に未だ悔いず、利の為にして止まらば真に貪饞」とある。ここでは、続く17句から20句に飲食物の話題を歌うとおり、食い意地がはっていることを述べている。二句は、老い衰えて心が冷え枯れた今となっても、なお饞貪の習性が抜けない、と詠じている。17〇白啖一句　白啖は、詳らかにしない。王十朋注に引く趙次公注に「或るひと、荔支の名と云う。未だ詳らかにせず」と言う。一句を、「熊白来山北」に作るテキストもある。熊白は、熊の脂。『国訳本草綱目』巻五一二「獣部」獣類に「羆、脂、熊白、肉、掌」とある。17句から20句が15 16句をうけて、饞貪の例を披露していることから、ここで、珍味とされる熊白が挙げられるのは首肯できる。河朔は、黄河以北の地方。18〇紅消　干した荔支の名と思われる。蘇轍「乾荔支」詩（『欒城集』巻一二）に「紅消　白瘦　香猶お在り、想見す　当年の十八娘」とある。〇剣南　剣閣の南の地方。19〇辛盤　盤は、料理を盛る大皿。辛盤を、春盤に作るテキストがある。辛盤は、五辛盤のことで、元日に五種の辛ものを用いた料理を盛る。春盤は、立春の日に韮などの生菜を盛る。元日の皿盛りを春盤と言う例は見られるが、立春の皿盛りを辛盤と言う例は見当た

らない。蘇軾「元日　丹陽に過る。明日は立春なり。魯元翰に寄す」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊二一六頁）を参照。ここでは、本詩が立春の日に因むことを踏まえ、春盤として解する。20○臘酒是黄柑　臘酒は、陰暦十二月に醸す酒。黄柑は、蜜柑のこと。蘇軾「洞庭春色　并びに引」（『蘇軾詩注解（十九）』）に、蜜柑を用いて醸した酒「洞庭春色」を絶品と称えている。その注を参照。21 22○帰臥・醒聞二句　二句は、この宴が果てて帰宅した後の自分の姿を想定している。一韓智翃の聞書に「言（フココロ）ハ、坡　端叔ト小集シテ飲（ン）デ帰（ツテ）見レバ、灯ガ帳ニ残（ツテ）有（ル）ゾ。サテ、酔（ヒ）モ漸ク醒（ム）ル時分ニ葉ノ庵ヲ打（ツ）ヲ聞（ク）ゾ。此（ノ）時分マデモマダ落（チ）ズシテ、アツタル葉コソ、アリツラウゾ」とある。23 24○須煩・重説二句　李居士は、李端叔のこと。詩題の注を参照。後三三は、禅で、数に限りがないことをいう。『広清涼伝』巻中（『大正蔵』第五一巻）に、僧無著が五台山で出会った僧（実は文珠菩薩の化身）に、五台山で仏法を行う人々の数を尋ねたところ、「前三三、後三三」という答えが返ってきたという話が見える。ここでは、禅の話題を持ち出して、李端叔に戯れている。『合注』に引く宋の顧禧の注に「蓋し端叔　定武の幕中に在りて、特に営妓の董九なる者を悦ぶ。故に九の数を用いて以て戯れを為すのみ」とあり、また、一韓智翃の聞書に「李端叔、法門ズキナル人ナル程ニ、一ツ法門ヲヲシナント云（ヒ）テ戯（レ）タゾ。句面ハカウゾ。句中ハ、言（フココロ）ハ、李端叔ガ定州ノ営妓董九ト云（フ）美人ニホレタ程ニ、其（レ）ニ戯（レ）テ云（フ）ゾ。端叔ドノニ御秘蔵ノ董九ガ事ヲ、カタラセ申サント云（フ）ゾ。妓女ノ事ヲ云（ヒ）テ戯（ル）トテ、シカモ禅語ヲ用（キ）タガ面白（イ）ゾ」とある。

白髪が混じる齢になって早や十年、春にふさわしいものは一つもありません。新たな年を迎えたからと心が騒ぐこともなく、しばし気心の知れた友と語りあうだけです。

土牛が丈夫で民びとは喜びの声をあげ、鴉がやんちゃに騒いで今にも雪が降り出しそうです。雪はちらつくだけで地面まで届かないでしょう、暖かくてきっと蚕によいはずです。

（この集い、）時季は、かの斜川の遊びに似ていますが、風流では、かの曲水の宴にひけをとります。河北の

地をあちこち歩いて詩を吟じながら老いていく我が身、まどろんで南は長江の水際を夢に見ます。

属僚のみなさんはこの老馬援を思いやって官務をこなしてくださるし、酒宴でどんちゃん騒ぎするにも、すすんで加わるこの曹参に、いちいち気兼ねしません。

私の心は老い衰えて、もう長いこと恬淡と安らかな境地にありますが、煩悩の名残で相変わらず食い意地がはっています。熊の背脂なら河北のもの、干した荔支なら剣南のもの。立春の料理の皿盛りには青韮がほしいし、年越し酒は黄柑を醸したもの。

（宴果てて）帰宅したら、燃えつきかけた燈火が灯る帳のもとで眠りにつき、目が覚めたら庵を打つ木の葉の音に耳をすますことでしょう。ひとつ李居士にお願いして、「後三三」についてさらに話していただかなくては。

（担当　原田直枝）

一九九一（施注三四―三〇）

次韻曾仲錫元日見寄

曽仲錫が元日に寄せらるるに次韻す

1　蕭索東風兩鬢華　　蕭索たる東風　両鬢華し
2　年年幡勝剪宮花　　年年　幡勝　宮花を剪る
3　愁聞塞曲吹蘆管　　聞くを愁う　塞曲の蘆管を吹くを
4　喜見春盤得蓼芽　　見るを喜ぶ　春盤の蓼芽を得たるを

5　吾國舊供雲澤米*　　吾が国　旧と供す　雲沢の米
6　君家新致雪坑茶**　　君の家　新に致す　雪坑の茶
7　燕南異事眞堪紀　　燕南の異事　真に紀するに堪えたり
8　三寸黄柑擘永嘉　　三寸の黄柑　永嘉を擘く

〔原注〕定武齋酒用蘇州米（定武の斎酒は蘇州の米を用う）
〔＊＊〕近得曾坑茶（近ごろ曽坑の茶を得たり）

元祐九年（一〇九四）、五十九歳の作。
○曽仲錫　曽孝広のこと。仲錫はその字。この時の定州通判。作品番号一九七二「曽仲錫承議が蜜漬の生荔支を食らうに次韻す」詩の注（『蘇軾詩注解（二十九）』）を参照。
1○蕭索　ものさびしいさま。陶淵明「自ら祭る文」（『陶淵明集』巻七）に、「天寒く夜長く、風気蕭索たり」とある。○華　ごましおの髪のさま。2○幡勝　立春の日に賜る金・銀・羅などで作った飾りもの。『蘇軾詩注解（一）』に収める作品番号一六〇〇の詩の注を参照。3○塞曲　国境付近の楽曲。杜甫「夜に觱篥を聞く」詩（『杜詩詳注』巻二二）に、「隣舟一たび聴けば感傷多し、塞曲　三更　欷かに悲壮なり」とある。○蘆管　北方の異民族の笛。あしの葉で管をつくり、管に穴を開けたもの。蘆笛、蘆笳ともいう。唐・李益「夜　受降城に上りて笛を聞く」詩（『全唐詩』巻二八三）に、「知らず　何れの処にか蘆管を吹く、一夜　征人　尽く郷を望む」とある。4○春盤　韮などの生菜や果物などを大皿に盛りつけたもので、立春の日に食べる。杜甫「立春」詩（『杜詩詳註』巻一九）に、「春日　春盤　生菜細なり、忽ち憶う　両京全盛の時」とある。前の詩（作品番号一九九〇）の注を併せて参照。○蓼芽　タデの芽。5○雲沢　雲夢沢のこと。昔、楚の国にあった大きな湖。『三国志』魏書・武帝紀に、「始め遷徙に因り、雲沢に遊ぶ」とある。原注によれば、ここでは蘇州を指す。6○雪坑　曽坑のこと。宋代の福建建安（今の福建省建

甌市）にあり、当時は高級茶の産地として有名であった。ここでは、曽坑の「曽」を曽仲錫の姓にかけて、「君の家」という。7○燕南　燕地の南、定州付近を指す。8○三寸一句　三寸黄柑は、三寸もある大きな蜜柑。杜甫「即事」詩（『杜詩詳注』巻二〇）に、「一双の白魚　釣を受けず、三寸の黄甘　猶お 自ら青し」とある。○永嘉　地名、今の浙江省永嘉県。六朝晋代に郡が置かれ、唐代に温州とも呼ばれた。蜜柑の産地として有名。○〔原注〕　定武は、定州を指す。唐代には義武軍が置かれたが、宋の太平興国元年（九七六）に定武軍に改められた（『元豊九域志』巻二）。斎酒は、祭祀に供える酒。○〔＊＊〕　6句の注を参照。

さびしい初春の風に両鬢とも白くなった一老人は、かつては毎年年賀の参内のとき宮中から賜った花飾りを頭に付けていた。（今では）アシ笛で辺境の曲が奏でられるのを聞いて憂え、縁起ものの春の料理が皿に盛りつけられるのを見て喜ぶ。わが江南から雲夢沢のお米をつねにもらってはいるが、あなたのところからは、このたび曽坑のお茶が届いた。燕地の南でこんな珍しいことはまことに記しておくべきで、遠く隔たった永嘉産の三寸ほどの黄柑を割って食べるなんてめったにないことなのだ。

（担当　蔡　毅）

一九九二（施三四―三一）

子由生日以檀香觀音像及新合印香銀篆盤爲壽一首

子由が生日に檀香の観音の像と新合の印香・銀篆の盤とを以て寿を為す　一首

1　栴檀婆律海外芬　　栴檀・婆律　海外の芬

2　西山老臍柏所薫　　西山の老臍は柏の薫ずる所

3 香螺脫鬣來相羣
4 能結縹緲風中雲
5 一燈如螢起微焚
6 何時度盡繆篆紋
7 繚繞無窮合復分
8 綿綿浮空散氤氳
9 東坡持是壽卯君
10 君少與我師皇墳
11 旁資老聃釋迦文
12 共厄中年點蠅蚊
13 晚遇斯須何足云
14 君方論道承華勳
15 我亦旗鼓嚴中軍
16 國恩未報敢不勤
17 但願不爲世所醺
18 爾來白髮不可耘
19 問君何時返鄉枌
20 收拾散亡理放紛
21 此心實與香俱焚

香螺　鬣を脱し来たって相群すれば
能く縹緲たる風中の雲を結ぶ
一燈　螢の如くして微焚を起こす
何れの時か度り尽くさん　繆篆の紋
繚繞として窮り無く　合して復た分かれ
綿綿として空に浮き　氤氳を散ず
東坡　是を持して卯君を寿ぐ
君　少きより我と皇墳を師とし
旁く老聃・釈迦の文を資る
共に中年に厄して蠅蚊に点ぜらる
晩遇　斯須　何ぞ云うに足らん
君　方に道を論じて華勳を承け
我も亦た　旗鼓　中軍を厳かにす
国恩　未だ報ぜず　敢えて勤めざらんや
但だ願う　世の醺ずる所と為らざらんことを
爾来　白髮　耘る可からず
君に問う　何れの時か郷枌に返らん
散亡を収拾して放紛を理めん
此の心　実に香と俱に焚ず

22　聞思大士應已聞　聞思大士　応に已に聞くべし

元祐九年（一〇九四）、五十九歳の作。

○子由生日　蘇轍は宝元二年（一〇三九）、二月二十日の生まれ。○檀香　ビャクダン（白檀）のこと。栴檀とも称する。インド・インドネシア産の香木（『国訳本草綱目』第三四巻）。仏像や仏具、扇子などの材料にも用いられる。○観音　観世音菩薩のこと。世の人々の声に応じて救済する菩薩で、様々な姿に変化するとされる。○新合印香　合は、複数の香を調合すること。印香は、そのようにして製した新種の香のこと（宋・洪芻『香譜』巻下「印香法」）。○銀篆盤　篆書の文字の形状に模して製した香（香篆）を焚くのに用いる、銀製の盤。『香譜』巻下「香篆」に、「木に鏤めて以て之を為り、香塵に範るを以て篆文と為す。然るに飲席或いは仏像の前に於ては、往往にして二三尺の径に至る者有り」とある。また同じく「百刻香」に、「近世の奇を尊ぶ者、香篆を作る。其の文は十二辰に準え、一百刻に分かつ。凡そ然やすこと一昼夜にして已む」とある。○為寿　長寿を祈る。○この詩は上平声十二文の韻を以て毎句に押韻するため、奇数句と偶数句とで意味的に対をなさない箇所がある。

1○栴檀。檀香に同じく、ビャクダン（白檀）のこと。詩題の注を参照。○婆律　香の名。龍脳香のこと。『梁書』海南諸国伝「狼牙脩国」に、産品として「婆律香」の名が見える。熱帯アジアに自生する龍脳樹の樹脂により製せられ、希少で貴重なものとされた。『国訳本草綱目』第三四巻を参照。○芬　よい香り。2○西山一句　臍は、ジャコウジカの臍（腹部）のこと。ジャコウジカの腹部にある麝香嚢から得られる分泌物により麝香（臍香とも称する）を製する。宋・高似孫『緯略』巻十「水麝」に、「天宝中、虞人　水麝を獲たり。臍香皆な水なり。取る毎に針を以て之を刺すに、香気　肉麝に倍す」（虞人は、山林沼沢の産物を司る役人）とある。また、ジャコウジカは柏の葉を食するとされた。嵇康「養生論」（『文選』巻五三）に、「麝は柏を食らえば香し」とあり、李善注に『本草名医』を引いて、「麝香　形は麞に似て、常に柏葉を食らう。五月には香を得、又た夏月には蛇を食らうこと多し。寒に至りて香は満つ」とある。西山については、『重修政和証類本草』巻一六「麝香」に、「中台の山谷、益州、雍州に生ず」

（中台は未詳）とあることから、ここでは、四川省（益州）から青海省（雍州の一部）の一帯をさすと思われる。3○香螺一句　香螺は、巻き貝の一種。その蓋の部分（甲香）を粉末状にしたものが、香の材料として用いられる（『徒然草』第三四段にみえる「甲香」がこれと同類と思われ、「ヘナタリ」と呼ばれたという）。洪芻『香譜』巻上「甲香」に『唐本草』を引いて、「蠡類の雲南に生ずる者は、大いさ掌の如く、青黄色にして長さ四五寸、甲を取り灰に焼きて之を用う。南人は亦た其の肉を煮て噉らう。今　香を合するに多く用い、能く香を発し復た香煙を聚むと謂う」とある。4○縹緲　ぼんやりしてかすかなさま。5 6○一燈・何時二句　繆篆は、字体の名で、六体の一つ。『漢書』芸文志（六芸略・小学）に、「六体とは、古文・奇字・篆書・隷書・繆篆・虫書。皆な古今の文字に通知し、印章を摹する所以なり」とある。二句は、篆文の形状に製した香篆（詩題の注を参照）に火を点けると、その蚤の光のような微かな火が、篆文状の線香を徐々に燃やしていくことをいう。7○繚繞　まつわりめぐる。この句も前の句に続いて、線香の火が篆文の形状をなぞりながら燃えていくさまをうたう。8○綿綿一句　この一句を欠くテキストがある（王本など）。綿綿は、ながながと続いて絶えないさま。『老子』第六章に、「綿綿として存するが若く、之を用いて勤れず」とある。氤氳は、雲や煙などの盛んなさま。「雲龍山に焼を観て雲の字を得たり」詩（『蘇軾詩注解補（一）』所収）の注を参照。9○卯君一句　卯君は、蘇轍のこと。蘇轍の生まれた宝元二年（一〇三九）は己卯の歳。寿は、長寿を祈る（寿を為す）こと。詩題の注を参照。10○皇墳　三皇（伏羲・神農・黄帝）の時代の書物（三墳）。ここでは儒家の経典のこと。韓愈「酔いて張秘書に贈る」詩（『韓昌黎集』巻二）に、「険語は鬼胆を破り、高詞は皇墳に媿ぶ」とある。11○老聃　老子のこと。聃はそのおくり名。○釈迦　仏教の始祖、釈迦牟尼のこと。12○点蠅蚊　ハエやカに汚される。『後漢書』楊震伝に、「青蠅の素を点ずるは、茲と同に藩に在り」とある。また、韓愈「雑詩　四首」その一（『韓昌黎集』巻七）に、「朝蠅は駆るを須いず、暮蚊は拍つ可からず、蠅蚊　八区に満つ、尽く与に相格つ可けんや」とある。13○晩遇　晩年に知遇を得ること。白居易「曲江　秋に感ず　二首」その一（『白居易集箋校』巻一一）に、「晩遇　何ぞ言うに足らん、白髪　朱紱に映ず」（朱紱は、緋色の官服）とある。○斯須　しばし。須臾に同じ。『蘇軾詩注解（三十）』

に収める「鶴歎」詩の注を参照。14○論道　『尚書』周官に、「道を論じ邦を経し、陰陽を燮理す」（燮理は、調和させる意）とある。○華勲　『尚書』堯典に、堯の徳をたたえて「放勲」（上代の事績に倣う意）と称し、同じく舜典に、舜の徳をたたえて「重華」（徳の輝きを重ねる意）と称することから、堯舜のことを華勲ともいう（『史記』五帝本紀では、放勲・重華をそれぞれ堯・舜の名とする）。韓愈「酔いて張秘書に贈る」詩（『韓昌黎集』巻二）に、「方今太平に向かい、元凱　華勲を承く」とある。承は、輔佐する意。丞（拯）に通じる。15○旗鼓　戦いに用いる旗と太鼓。『春秋左氏伝』成公二年に、「師の耳目は、吾が旗鼓に在り。進退之に従う」とある。○中軍　諸侯は、上・中・下（または左・中・右）の三軍を擁し、総大将は中軍を率いる。『春秋左氏伝』桓公五年に、「秋、王　諸侯を以て鄭を伐つ。鄭伯之を禦ぐ。王　中軍と為る」とある。このとき蘇軾は、知定州・河北西路安撫使・馬歩軍都総管として、その地の軍隊を管掌する任に在った。17○醺　酔う意。引いて、染める（染まる）ことをいう。18○耘　草を取る。ここでは、除去する意。19○鄉枌　漢の高祖劉邦は、沛（江蘇省）の豊邑の出身で、世に出る前に地元の枌榆の社（ニレの木のある社）に祈った（『史記』封禅書）。このことから、枌榆は郷里を意味するようになった。張衡「西京の賦」（『文選』巻二）に、「豈に伊れ枌榆に帰るを懐わざらんや」とある。郷枌はこれに因む表現で、蘇軾の造語と思しい。20○収拾　拾いあつめる。○散亡　散らばってなくなる。『史記』儒林列伝に、「秦の書を焚くに及至りて、書　散亡すること益ます多し」とある。○放紛　まとまりがなく乱れること。『春秋左氏伝』昭公十六年に、「獄の放紛なる、会朝の敬せざる」とあり、杜預の注に、「放は、縦なり。紛は、乱なり」とある。この一句について、一韓智翊は三つの解釈を示したうえで、「我ガ一心ノ散乱スルヲヲサメテ、チヤウト思イ定（メ）テ帰ル可（キ）ト思フゾ」との解釈を良しとする（『四河入海』巻二二の四）。21○焄　熏に同じ。ふすべる。くすべる。22○聞思大士　観世音菩薩のこと。『楞厳経』巻六（『大正蔵』第一九巻）において、観世音菩薩が、聞・思・修の三慧（仏道修行の三つの次第で、他より教法を聞いて得る聞慧、自ら思惟して得る思慧、実地に修行して得る修慧）により禅定を得た、と語ったことに由来する名称。

旃檀・婆律は海外に産する名香で、西山に得た麝香は柏葉のよい香りがする。香螺の蓋で製した粉末と練り

あわせれば、風のなかに芳しい雲がふんわりと結ぶというもの。香篆に蛍の光のように小さな火をそっとともすと、火は篆文のかたちに添って、いつ果てるともなく篆盤の上をめぐってゆく。合わさったり離れたりしてまつわりめぐり、お香の煙は盛んに上がって絶えることなく広がりただよい続ける。これらを卯年生まれの君へ贈る長寿の祝いとしよう。

君は小さい頃からぼくとともに儒の道を身につけ、加えて道家や釈氏の典籍からも広く学んだ。中年に到ってから共にハエや蚊のごとき奴らに苦しむことになり、老いて栄達を得てはいても、それとて所詮つかの間で言うに及ばぬこと。

いま君は明主のお側に仕えて天下を統べる道を論じ、ぼくは（ここ北辺に）旗鼓勇ましい陛下の軍隊を預かって守りを固めている。君恩に報いることもならぬうちは、まだまだ勤めずにはいられないが、その間に俗世のけがれにだけは染まらぬようにありたいものだ。

そうこうするうちに最近はどうしようもないほど白髪が増えた。いつになったらお暇をいただいて郷里に帰るのか、君には決心が付いたかね。そのためには失ったものを取りもどして、千々に乱れた心をきれいに整理しなければ、とぼくは思っている。そんな気持ちが香を焚いた煙のようにずっとただよい続けているのだが、観音菩薩はきっともうそれを感じておられることだろう。

一九九三（施三四―三二）

次韻李端叔送保倅翟安常赴闕兼寄子由

李端叔が「保の倅翟安常の闕に赴くを送る」に次韻して、兼ねて子由に寄す

1 中山保塞兩窮邊　　中山　保塞　両つながら窮辺
2 臥治雍容已百年　　臥治　雍容として　已に百年
3 顧我迂愚分竹使　　顧みるに我れ迂愚にして竹使を分かち
4 與君談笑用蒲鞭　　君と談笑して蒲鞭を用う
5 松荒三徑思元亮　　松は三径に荒れて元亮を思い
6 草合平池憶惠連　　草は平池に合して恵連を憶う
7 白髮歸心憑說與　　白髪の帰心　憑りて説与す
8 古來誰似兩疏賢　　古来　誰か両疏の賢に似ん

元祐九年（一〇九四）、五十九歳の作。

○李端叔　李之儀のこと。端叔はその字。『蘇軾詩注解（一）』に収める作品番号一五九七の詩の注を参照。李之儀の元の詩は伝わらない。○保倅　保は、保州（河北省）、倅は、通判のこと。○翟安常　伝不詳。

1○中山　定州（河北省）の別称。戦国時代、その地に中山国があったことによる。○保塞　保州（河北省）のこと。太平興国六年（九八一）、保塞軍を廃して保州を置いた（『元豊九域志』巻二）。○窮辺　遠く辺鄙な場所。蘇舜欽「己卯の冬、大いに寒くして感ずる有り」詩（『蘇学士文集』巻一）に、「窮辺　苦寒の地、兵気　相纏結す」とある。2○臥治　寝そべったままで治める。労せずして民を治めること。『蘇軾詩注解（三）』に収める作品番号一六二四の詩の注を参照。○雍容　心おだやかに寛ぐさま。「岑著作を送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊二三四頁）を参照。3○迂愚　世情にうとく、愚かなこと。元稹「滎陽公に献ずる詩　五十韻」（『元稹集』巻一二）に、「拙劣にして仍お速に非ず、迂愚にして且つ専に異なる」とある。○竹使　竹使符。漢代、郡守に与えられた竹製の割り符のこと。『蘇

軾詩注解(二)』に収める作品番号一六一二の詩の注を参照。4○談笑　笑いながらうちとけて話す。副詞的に用いて、「くつろいだまま」、「やすやすと」といったニュアンスを表すことが多い。左思「詠史　八首」その三（『文選』巻二一）に、「吾れ魯仲連を慕う、談笑して秦軍を却く」とある。○蒲鞭　蒲のムチ。打っても痛みが少なく、罪人に恥辱のみ与えることを目的とする。『後漢書』劉寛伝に、「吏人に過ち有れば、但だ蒲鞭を用て之を罰し、辱めを示す而已にして、終に苦しきを加えず」とある。5○松荒一句　元亮は、晉の陶淵明の字（『晉書』陶潛伝。陶淵明の名と字には諸説ある）。陶淵明「帰去来の辞」（『陶淵明集』巻五）に、「三径は荒に就けども、松菊は猶お存せり」とある。一韓智翃は、「三径ハ故園ヲ指（ス）ゾ。淵明ハ坡自（ラ）比（スル）ゾ」（『四河入海』巻二二の三）と記す。○草合一句　恵連は、南朝宋の謝恵連のこと。謝霊運の従弟。鍾嶸『詩品』中品の「宋の法曹参軍謝恵連の詩」に引く『謝氏家録』に、「康楽（謝霊運の字）は恵連に対する毎に、輒ち佳語を得。後、永嘉の西堂に在りて、詩を思うも終日就らず。寤寐の間、忽ち恵連を見るに、即ち「池塘　春草を生ず」を成す。故に常に云えらく、「此の語は神助有り、吾が語に非ざるなり」と」とある。一韓智翃は、「言（フココロハ）、弟（ノ）子由（ヲ）憶（フ）ナリ。恵連（ヲ）以（テ）子由（ニ）比（スル）ゾ」と記す。7○説与　言ってきかせる。8○両疏　漢の疏広と、そのおいの疏受のこと。二疏とも呼ばれる。それぞれ太子太傅・太子少傅となったが、在職して五年を経たとき、このまま地位に恋々として去らなければ後悔するだろうとして、辞職を乞うて許され、故郷に帰った。時の人に賢者と称えられたという（『漢書』疏広伝）。「孫巨源の漣水の李・盛二著作に寄せて……」その二の注（『蘇東坡詩集』第三冊四一六頁）を参照。

北辺の果てに位置する中山・保塞の両地は、寝そべって寛いだまま治まるほどの安寧がもう百年も続いている。思えば私は役立たずなのに、割り符を預かる天子の使者として、あなたとの談笑の間に形ばかりの蒲の鞭を揮ってきたのだ。

今の私は、松生うる庭の三本の小径は荒れているだろうか、と郷里に思いを馳せた陶元亮や、池の塘が春

の草におおわれるのを見て、弟の恵連を記憶の中から浮かびあがらせた謝霊運のような心境だ。白髪頭のその私が抱く帰郷の念を伝えて聞かせよう。潔く暇乞いをして故郷に帰った疏広・疏受のすばらしさに、古来およぶ者がいただろうかと。

一九九四（施三四―三三）

中山松醪寄雄州守王引進

中山の松醪、雄州の守　王引進に寄す

1 鬱鬱蒼蒼千歳姿　　鬱鬱たる蒼蒼　千歳の姿
2 肯來杯酒作兒嬉　　肯て杯酒に来たって児嬉を作す
3 流芳不待龜巣葉*　　芳を流すは亀巣の葉を待たず
4 掃白聊煩鶴踏枝　　白を掃いて聊か鶴踏の枝を煩わす
5 醉裏便成敲雪舞　　酔裏は便ち雪を敲つる舞を成し
6 醒時與作嘯風辭　　醒時は与に風に嘯く辞を作す
7 馬軍走送非無意　　馬軍　走りて送る　意　無きに非ず
8 玉帳人閑合有詩　　玉帳　人は閑にして合に詩有るべし

〔原注〕唐人以荷葉爲酒杯、謂之碧筩酒（唐人は荷葉を以て酒杯を為る、之を碧筩酒と謂う）

元祐九年（一〇九四）、五十九歳の作。

○中山　定州の別称。前の詩（作品番号一九九三）の注を参照。○松醪　松脂または松花（花粉）を用いて造る酒。

「中山松醪の賦」（『蘇軾文集』巻一）は、この詩とほぼ同時期に作られたと思われるが、そこには、「通明を盤錯に取り、肪沢を烹熬に出だす」と、松から松脂を取って松醪を製するさまを詠じていることから、ここでいう松醪は松脂を用いたものと思われる。『本草綱目』（巻三四）木部・松の「松脂」の附方（肝虚目泪）の条に、松脂を用いて酒を釀す記事がみえる。○雄州　今の河北省雄県。○王引進　王崇拯のこと。字は拯之。宋の使者として遼に赴いたことがある。『続資治通鑑長編』元祐四年三月壬申の条に、王崇拯が知雄州に再任されたことがみえるが、それ以後については記述がない。引進は、引進使（引進司使）のこと。臣僚・外国より献上された礼物の事を司る（『宋史』職官志六「客省・引進使」。なお、『続資治通鑑長編』元祐八年五月辛巳の条に、「王崇極をば引進使と為す」との記述がみえる）。

1○鬱鬱　樹木のこんもりと盛んにしげるさま。左思「詠史　八首」その二（『文選』巻二一）に、「鬱鬱たり　澗底の松、離離たり　山上の苗」とある。「子由が「木山に水を引く」に和す」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊五七五頁）を参照。○蒼髯「蒼髯の叟」（青いひげの翁）は、松の異称。「仏日山の栄長老の方丈　五絶」その一の注（『蘇東坡詩集』第三冊二三頁）を参照。2○児嬉　子どもの遊び。子どもじみた戯れ。「安惇秀才が失解して西に帰るを送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊三一頁）を参照。3○流芳一句　流芳は、よい香りをただよわせること。曹植「洛神の賦」（『文選』巻一九）に、「椒塗の郁烈なるを践み、蘅薄に歩して芳を流す」（椒塗は、山椒の道。蘅薄は、香草の茂み）とある。亀巣は、ハスのこと。『史記』亀策列伝に、「亀は千歳にして乃ち蓮葉の上に遊ぶ」とある。「文与可の「洋川の園池　三十首」に和す、菡萏亭」の詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊五四頁）を参照。原注によれば、一句はハスの葉を用いた碧筩酒について述べる。『酉陽雑俎』巻七「酒食」に、「歴城の北に使君林有り。魏の正始中、鄭公愨　三伏の際、毎に賓僚を率いて暑を此に避く。大なる蓮葉を取りて硯格の上に置き、酒二升を盛り、簪を以て葉を刺し、柄と通ぜしむ。屈茎の上、輪菌たること象鼻の如く、伝えて之を嗡わしめ、名づけて碧筩杯と為す」とある。青木正児「酒觴趣談」（『中華名物考』所収）を参照。4○掃白一句　掃白は、白髪を黒く変えること。杜甫「丈人山」詩（『杜詩詳注』巻一〇）に、「白髪を掃除するには黄精在り、君看よ　他時　氷雪の容を」とある。鶴踏は、

松のこと。『白孔六帖』（巻一〇〇）松柏「鶴棲」に、「千歳の鶴は、松柏に棲む」とある。５６〇醉裏・醒時二句二句について一韓智翃は、「坡（ガ）言（フココロ）ハ、我レ此ノ酒ヲ飲（ン）デ酔（ヒ）テ舞（フ）、則（ン）バ其ノナリハ松ノ雪ニ敲（ツ）ガ如キゾ。サテ醒（メ）テ吟詠スル、則ンバ風ニ嘯ク音ヲナスゾ」と記す（『四河入海』巻二〇の二）。７〇馬軍　騎兵。松醪を王崇拯に届けた騎馬の兵士のこと。杜甫「厳中丞が青城山の道士の乳酒一瓶を送りしを謝す」詩（『杜詩詳注』巻一一）に、「鞭を鳴らし走り送らしむるは漁父を憐れむ、盞を洗い開き嘗めて馬軍に対す」とある。８〇玉帳　将軍の陣営のとばり。『蘇軾詩注解（三十）』に収める作品番号一九八一の詩の注を参照。〇〔原注〕　3句の注を参照。馮応榴は、宋本の施注にはこの注がみえないこと、この故事は唐人に始まるのではないこと、また、「舟を城南に泛ぶ。会する者五人、韻を分かちて詩を作る……四首」（『合注』巻一九）その三に、既にこの故事が用いられていることなどから、この原注が蘇軾の自注であるかは疑わしいとする。

青々とした枝を鬱蒼と茂らせる千年の姿の松が、いたずらっ気を起こして一杯の酒の中に入ってやって来てくれた。松醪は芳しい香りをたてるから、わざわざ蓮の葉を酒杯とするまでもない。その力を借りれば白髪を一掃することだってできるというもの。

酔って舞をまえば、その姿はあたかも降る雪のなかで風に傾く松さながら。醒めてうたえば、松籟を受けてうそぶくかのような詩ができる。さてその松醪を、走り使いの騎兵に託してお送りするのは考えあってのこと。陣営の帳のなかはさぞ平安でありましょうから、酒杯を手にのんびりと詩をお作りいただきましょう。

（担当　西岡　淳）

三三